№41

# 芥川だより

編集発行人　下村嘉明
発行所
☆ 着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町2－14－3
℡072－681－8870

発行日＊＊＊2010年1月1日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
皆様からの投稿をお待ちしております
http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

＊＊＊＊＊＊＊＊　一部５０円です　＊＊＊＊＊＊＊＊

## 手紙

葉書きにしても封書でも私は苦手である。手紙を書くことも好きではないが、読むのが大の苦手である。このありさまを理解して頂くのはいささか難しいかもしれないが、恥を忍んで書いてみようと思う。

手紙を最初に書いたのはいつだったろうか。多分正月の年賀状ではないかと思う。従兄弟や小学校の同級生に二、三枚書いた。家族の者達にくる年賀状が自分に来ない事に妙に苛立った記憶がある。大人たちに賀状が来て幼い私に来ないのは当たり前なのだが、生意気にも自己顕示欲が強かった為か賀状が来ないということで私の存在を軽んじられているように感じたのだ。面白くない、何とかもらいたい、早く大人のようになりたい、こんな思いで次の年から賀状を書き出した。従兄弟などに書いても面白くない。親戚でない人から欲しい、できれば遠くの人から、家族の者達が驚くような人からほしい。

まあそんな事はあるわけがないのであるが、せめて小学校の同級生から貰いたい。可愛い女の子であればもっと嬉しい。こんな思いで幾枚か書いた覚えがある。書いた賀状はとても冷静に読めないが、思い切って出した。送った相手の二、三人は返事をくれた。ありきたりの文面が書かれているのであるが、私は異常に気分が昂ぶって読めないのである。一度目はさっと流し読みして怖れるような語句がないことを確かめてから、少し冷静に再度読み始めるのであった。それでもドキドキする気持ちを抑えることは出来ず読み返す事五度目ぐらいにしてやっと文面を理解するのである。

もしも、最初に嫌な語句を見つけたりしたら二度目に読む勇気がわいてこないから読まずに置いておく。暫くして気合を入れなおしてから読み直すのである。

こんな性格は今も変わらない。手紙なら葉書きでほしい、封書は封を切る時に何ともいえない恐れを感じる。折られた便箋を開ける時には胸が高鳴り文字が襲ってきそうに思うのだ。

こんな事を家内に話していたら「私も、あなたに来た封筒を怖いと思う事がある。借金の催促ではないかと思うのよ」まだ何処かから催促が来るのではないかと思っているから余計に手紙が怖いのだ。

## 連載　爺捨て山 14

梵店主

娘に加齢臭がどうのこうのと言われるとツライ。風呂場で石鹸を使わない主義で通してきた。下の娘がアトピーであった時に「石鹸を使わずにいたら治る」と言ったら本当に治った事もあり、無用に洗わないことを健康方法の一つと合点してきた為に、臭いがどうだこうだという話になれば強気になれない。

だいたい若い時には、気にもかけずにいたことが、だんだん身体のあちこちから起きてくる。食べていてモノを落とす仕草など自分でも笑えてくる。箸を持つ力の加減か知らないが、つまんだつもりのモノが落ちるのである。気にしてはいるが、知らぬ間に落としている。

こんな無意識な身体の動きに心配をしてもつまらんだけだ。身体を鍛えて若さを取り戻すなんて考えないことにしている。しかし、臭いを言われると何故か嫌だ。嫌われそうなことは身なりや振る舞いが主だが、その上臭いまでもとなると「もう、どうでもいい。ほかしといてくれ」と言いたくなる。そこまで娘に媚びて生きたくはない。そんな自尊心が頭をもたげてくれば、この世では始末がつかない。爺捨て山でけりをつけるしかない。いくら辛かろうとも、人目に晒したくはないから。

# ヒマラヤへの道3

梵店主

「会社辞めたら、運ちゃんぐらいしかなれへんで、どないするんや」といった雑音を、よっちゃんの会社の先輩たちから聞かされた。滅多に退社する人はいないらしい。よっちゃんは「本当にそうだろうか？　みんなおどかすかめに言っているに違いない」と独り合点したが、現実はもっと厳しい状況が待ち構えていたのだ。

親爺を泣かしてまでも退社したが、行くあてがない。ヒマラヤへ行きたい気持ちはあるが、どうしたらいいのかわからない。田舎の実家での冷たい親達の視線に耐え切れず京に戻ったが、住まいがない。肝心の先輩である石川さんに「しもやん悪いけど、俺はヒマラヤに行けんわ」と断わられて途方に暮れた。

「なんでや、行くゆうてたのに…」。仕方がない。今更ヒマラヤ行きを止めるわけにはいかん。何が何でも行かな、と独り考えた。山岳部の先輩に相談したが「おまえが勝手に会社辞めてきたんやから知らんわ…」というような具合で冷たかった。

「よおーし、やったるで！」と思い直して作戦を練った。

先ず、住むところと食べる事を考えねばならなかった。次にヒマラヤへの準備をしなければならないので、昼間自由に動けるようにできる仕事を考えた結果、住み込みの新聞配達をすることに決めた。朝早くから起きて配達して、昼間は自由だから山の情報と金集めの作戦を考えることにした。

よっちゃんが無謀ともいえる行動を始めて間もなく、山岳部の新人歓迎コンパを兼ねた山岳会の総会が湖西の山小屋で開かれた。よっちゃんは、もしかしたら参加者の中からヒマラヤへ行く希望者がいるかもしれないと期待して行った。

山小屋に集まってきたOB達は、よっちゃんにとっては皆偉い先輩達ばかりで気安く話せるような人は誰もいなかった。総会の議題にすらならなかったよっちゃんのヒマラヤ行きは誰も関心がないように見えた。よっちゃんは一言も発言できずにいた。総会も終わり懇親会に移り、酒を飲み出し宴会が盛り上っていたが、よっちゃんは酒を飲んでも酔えなかった。何とか同志を探し出さねばならない。

よっちゃんは、思い切って期待できそうなOBにそれとなくヒマラヤの話をしたが、一九七〇年のダウラギリ1峰でヒマラヤは終った、と取り合ってくれない。

山小屋に集まったOBたちは、よっちゃんの話に耳を傾けようとしないが…

ヒマラヤの未踏峰に挑み輝かしい歴史をもつOBも、よっちゃんの声を聞く状況には無かったのかもしれない。夜も更け、OB達は小屋に寝床を求めて焚き火の回りからいなくなりだした時、新人達の世話をしていた現役の山猿と由べえが、よっちゃんに近づいてきた。

酒がこんなにも孤独にさせるとはよっちゃんは知らなかった。いくら飲んでも皆と交われない疎外感を心底味わっていた時である。

よっちゃんが、山猿に、

「おい、ヒマラヤ遠征やれへんか？」と聞いた。

「行ってもいいですよ」と山猿は答えた。傍にいた由べえも

「僕も行ってもいいですよ。金はありませけどね」と言った。

よっちゃんは、先ほどの弱気が嘘のように、「金は、なんとかするから行こう」と大風呂敷を広げた。二人も味方が出来たので強気になった勢いで若手のOBの二人に声をかけた。

エンジニアである村松先輩は、「おれは、何とか会社を説得して行く。もしダメなら会社を辞めてでも行く」と頼もしい返事であった。

もう一人の先輩も行くと言い出した。

よっちゃんは、思いもかけない希望者がいた事を喜んだ。持つべきものは、よき先輩、後輩であると有頂天になった。一度に酔いがまわりだして、ヒマラヤ行きの話に夢中になった。山猿が「大学は、どうしましょう？」と聞くので、よっちゃんは大胆にも「学校なんか何の役にも立たないからやめろ」と言い出した。現役の学生である山猿と由べえの二人は素直に「わかりました」と返事したのであった。

翌日、朝早く起きて二日酔いが抜け切らないうちに、よっちゃんは、昨夜の話の確認をヒマラヤ計画に賛成してくれた四人にした。四人とも覚えていてくれて、酒の上の話ではない事を確かめて今後よっちゃんが連絡役になって計画を進めることにしたが、何をどうしたらいいのか全くわからなかった。

# 出家6

上原むつえ

千葉の祈祷師は、私を家に招きいれてくれた。

高知の寺の修復について私は聞いた。

「私が手をつけてもよいか。つけるとすればどんな方法があるのか」

祈祷師は、真っ赤に燃えている練炭の九つの穴に火箸を突っ込んで占って

「人智無量」

と大きな声で私に言った。やれば道は開ける、という意味に私は解釈した。

その祈祷師の言葉を信じて高知南国の寺の修復をやる決心をしたのである。

寺の檀家が少なくても、檀家総代をはじめ寺役の人々の了解と協力をお願いしなければならない。

大工をはじめ毎日五十人の人達が作業にあたった。その中には多くのボランティアの人達もいた。

私は、その人達の為に食事の用意を毎日した。美味しく食べてもらうために味付けや食材には気をつけた。

何より苦労したのは大工に払う金であった。毎月毎月払う金は大変な額であった。この金を用意する為に大変な苦労をした。檀家からの援助を期待できない以上、自分で都合つけなければいけなかった。身延山からの金銭の援助は何もない。

まず、最初に行なったのは托鉢である。朝から夕方まで京都の四条大橋のたもとに立って、『法華経』巻第六の「如来寿量品」を唱えつづけた。一日立ち尽くすと、およそ四万円程の浄財が集まった。ほとんどは硬貨なのでたいへん重く、背負い袋に移してようやく運べるほどであった。

「如来寿量品」は約四分で唱えることができるので、一日約四百回ぐらい唱えることになる。

京都の久成院に私の先輩がいたのでそこに泊めてもらい、毎日四条大橋に通ったのである。一ヵ月に二十日ほど、雨降りや用事のある時以外は立ち続けた。十六年間でおよそ一億円の浄財が托鉢で集まった。

時には福井にも足をのばし、托鉢をした。門徒の多い地域では、多くのお金が集まった。

寺の建築はたいへんお金がかかる。最高の材木を集め、最高の大工に仕事を依頼し、数百年もつような建物にしなければならない。民家のような一般建築とは比べものにならない費用がかかるのである。

寺の修復をやる決心はしたものの、金はなかった。少ない檀家からの寄付ではどうしようもなかったのである。

富士山麓に広がる茶畑

かかる費用については、すべて私が責任を負わなければならなかった。お金の工面にたいへん苦労した。

托鉢で集めた浄財だけでは間に合わない。実家の兄に幾度もお願いに行き、用立ててもらった。兄はたいへん理解のある人で、多額の寄付をその都度してくれた。

実家は広大な茶畑を所有し、製茶業を営んでいた。父は跡継ぎの兄に、茶畑で採れる一番いい茶の収益は私に渡すように言ってくれていた。静岡は茶の名産で、その値もはる。その中で最も優れた茶を売った利得は、私におくるように兄に言いつけていたのである。その金額は莫大であった。そのすべてを寺の建築のためにそそぎ、完成をみるのである。

父は婿養子として母と結婚した。近在の農家の出である。

私の実家のある大淵村は富士山の火山灰と火山岩で出来た地盤である為に水利が悪くて困っていた。そんな村人の願いをかなえる為に、父は大きな井戸を掘る事を決意する。掘削する費用がなかった。いまのお金に換算すると数十億かかるとみられたが、銀行に融資を申し込んでも相手にされなかった。

跡継ぎである母に頼んだところ「時勢が変われば家の財産はどうなるかわからない。皆さんが喜んでくださる事ならやってください。私が銀行に頼みます」

と母は父に答えた。そうして井戸堀が始まった。

しかし、毎日多くの人達で掘り続けても水は出てこなかった。年々銀行からの借金が増えつづけて数年が経った。村の人達もこれ以上掘削費用がかさめば私の家もつぶれるだろうと思ったらしい。

五年も掘りつづけて二十五億円を使っても水が出なかった。母も病死して家もどうなるか分からぬようになった時に水が出た。大きな水脈を掘り当てた。

この井戸の水利権が家の大きな収入になった。この収入からも多くの金額を寺に寄付してもらった。

実家からの多額の援助が私にとって大きな助けであった。

## 義兄とその家族（1）

○九年十月に、義理の兄が肺癌を宣告された。七月ぐらいから、胸に痛みがあったらしく、八月は転勤先である四国の大学病院でさまざまな検査を受けたが、なぜか癌だという確証が得られず、大阪の森ノ宮成人病センターに転院した。

義兄の病気で、いわゆる健康オタクの姉は奮起した。まず、ヨーグルト。NHKの健康番組「ためしてガッテン」で、薬の副作用を抑え腸内環境を整えるキメ手だというような取り上げ方をされたとかで、姉はオリゴ糖やらブルーベリー（「目ェも大事やからね」）まで混ぜて、大量に義兄に食べさせた。次に、ニンジンジュース。ドイツのお医者さんが自らのガンを治したという「ゲルソン療法」だ。そして、ショウガ紅茶。健康マニアの人なら誰でも知っている、体を温めて病気を退治するという自然食療法の王道。そして、水。

姉はこれらをセッセと病院に運んで、義兄がきちんと食べたり、飲んだりするよう厳重にチェックした。義兄と姉がもし同じタイプの人間だったら、姉がしていることは、尊い「献身」と言えただろう。姉は自分の食事もそこそこに、病院に通い、ほぼ一日、付き添っていた。

「だってな、私が見てへんかったら、ちょっとしか口に入れへんねんもん」

そう、不幸なことに、義兄はこうした姉の健康指向とは正反対の現代西洋医学信奉者。

「そんなモンで治るわけないンだ」（義兄は東北の出身で関西弁ではない）と、胸中「有難迷惑なんだよな」と思っていた。

だが、恐妻家の義兄はそれを口に出せず、姉が死に物狂いで自分を助けたがっていることもわかっているので、渋々、付き合った。

母は「あんなにたくさん、ヨーグルトを食べさせられて」と義兄に、母にしたら義理の息子に同情した。

姉と母は、昔から意見が食い違う。世間体を大事にする中庸派の母と、いつもなりふりかまわず、極端な生き方をする姉。でも、三人姉弟の一番上の姉を母はいつも気にかけ、また頼りにもしていた。

癌という思わぬ事態に遭遇しなければ、「性格とか生き方ってみんな違うから」で済んでいた。いまさら人生を一からやり直すというわけにもいかないから、ケンカしたり、ハラを立てたり、悪口を言ったりしながらも、一緒にごはんを食べ、義兄は会社に行きそのお金で少なくとも姉はつつがなく暮らしていられたし、その家族も平穏だった。

しかし、癌という生死に関わる問題が降ってわいて、「生き方の食い違い」が顕著にあらわれた。たとえば。病院では

「お通じはありましたか？」とナースに聞かれて、

「今日はありませんでした」と答えれば、

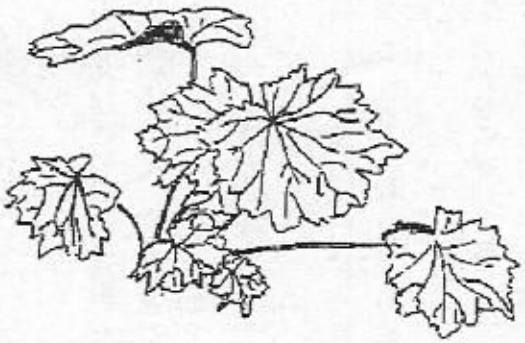
「では便秘薬を出しましょうか」という展開になる。これを姉はキチガイのように嫌がった。

「それでなくてもクスリ漬けやのに。ちょっと、サツマイモを食べたり、リンゴを食べたら、ちゃんと出るのに」とじだんだを踏んだ。私自身も、クスリより食べるものの方が人間の体には良いと信じているが、だからといって、病院で患者に

「便秘ですね、ではサツマイモをふかしましょう」と言うわけないとも思っている。姉は言う。

「そうやで。だから、いちいち看護婦に余計なことを言わんでいいねん！」と怒る。

看護師サンと呼ばなくてはいけないのだが、姉はすべてにアタマにきているので、義兄の主治医のことは「あの医者」と呼び、「看護婦」と言い放つ。もちろん、ご本人らのいないところで、だけど。



姉がアタマにきたのはセカンドオピニオンを巡る見解の相違だ。姉は最先端医療を義兄に受けさせるつもりでいた。健康オタクだから、ダメージの少ない癌治療でなければ、ということで最先端医療。

ところが、医者と本人がこれに懐疑的だった。医者は言ったそうだ。「それならとっとと退院しろ」。いまどき、まさかこの言葉通りに言ったとは私も思わないが、患者とその妻はそういうニュアンスで受け取った。

姉が選んだのは「粒子線療法」。このてん末は次号で。（AO）

# 「一年の計」

明石幸次郎

年が改まっても、正月らしさが年々無くなっているように感じられますが、還暦を迎えるようになった歳のためでしょうか。元旦から繁華街はいつもと何も変わらない日常的な風景です。以前は正月の3が日は商店街をはじめ、デパート、スーパーマーケットも正月休みで店は完全に閉まり、町に出ても営業しているのは、初詣客相手の飲食店くらいで、華やかな晴れ着で着飾った女性も多く、普段と違った正月ならではの非日常的で、どこか清楚な雰囲気があったものです。最近では元旦から初売りと称して福袋を目玉に、どこのデパート、スーパーマーケットも客の奪い合いをして売上げ競争をしています。数年前までは元日は休みで2日か3日あたりに初売りが始まっていましたが、今や他店に負けじと従業員の折角の正月の家族団らんの時間を犠牲にしてでも、経営者は仁義なき売上げ競争を元旦からスタートをさせています。3が日が過ぎるとその反動でガタンと売上げが落ちるのも分りながら、休んでいては正月早々より他店に客を奪われるという恐怖感からか、他社と同じ行動を取って安心する横並び意識からか、年がら年中、節操の無い売上げ競争をしています。

これに比べ欧米では日曜は完全に店は休み、クリスマスとなれば全ての店は何日か休みで、当然家族団らんの時間を大事にして、働くことと休息とのメリハリをつけています。これが社会の常識で当然のルールとなっています。日本の年末から正月を迎え、年が改まり新たな気持ちで町も人も新年を迎えるいう非日常的な日本人としての大事なものを失いつつあるような気がします。これは、不景気からくる経済的精神的な余裕の無さがそうさせているのか、其々の人も正月だけでも休み、気持ちを改め、家族で迎え、お屠蘇、雑煮で新年を祝い、母親が暮れから作った重詰めされたお節料理を食べる行事は景気に関わらず、家族がお互いの家族としての精神的な繋がりを意識する大事な行事、儀式として伝承し子供にも伝えたいものです。日本の正月行事が神道からくる行事とすれば、欧米のクリスマス行事と精神的なものは別にして共通するものがあります。それがあるからこそ伝統、文化をもった国と日本人も誇れるものではないかと思います。

さて、我家の正月は一年間大学を休学して、アメリカに語学遊学と中南米を4ヶ月間旅をしていた愚息が正月に合わせて帰国して、お節料理を食べながら、久し振りの日本の印象として曰く「日本人は電車の中で身体に当っても、誰も謝らない完全に余裕をなくしているし、皆暗い顔をして元気がない、店は休み無く開いてあくせく正月でも働いている。こんな国は先進国と言えないわ～。食べる為にあくせくしている貧しい国と変わらへん。しかも貧乏の国ほどなぜか皆んな明るいで～。旅で出会ったドイツ人、フランス人、イタリア人も一様に日本は自分達の国よりもはるかに金持ちで経済的先進国と言っていたわ。しかもこの人達は日本にも何回か来たことがあるので、お金持ちさを実感として感じたと言っていた。正月くらい皆休んだらどうなんや」これに対し、愚妻は「アンタは一年ぶりのまだお気楽な、旅人気分やから、日本の悪いとこが目につくんや～。それに今、日本は寒い冬やで～。暗い気分にもなるわ。日本人は勤勉やからこまでの国になったんよ。ラテンの国みたいな楽観的な国民性とは違うの！。アンタ、NHKの坂の上の雲を見ないとアカンわ。本でも読みなさい。

私等がお正月をのんきに過ごせるのも明治の先人が国のためを想って清国、ロシアと戦って独立国を保ったからよ。もし、日本が負けていたら、中南米の国と一緒で植民地にされ、今でも貧しい国で中国語かロシア語喋っているかも知れんよ。日本人が働きすぎやというのは国民性もあるので、欧米の白人とは働くという労働に対する意識が違うんのよ。アンタ大学で何を勉強してるの！。ところで、東京に戻ったら、就職活動を真面目にやって、卒業してちゃんと働いてよ～。お父さんも会社やめたんよ！」と愚息の旅の気分が半分壊れかかって、「分ってるわ、何か正月くらいは、就職の話しせんといて。でも正月はエエなあ～。お母さんの作ったお節料理上手いもんなあ。ところでお父さん会社を辞めて今何してんの。心配やなあ」と上手く話を交し、こちらにお鉢が廻って来そうになりましたので、「お前、自分のこと心配しとけ。お父さんは一年の計は元旦ありやから言うけれど、今年は第二人生で縁の合った会社でお役に立て、存在感が出るように働く。これやー。お前の一年の計は何や？」「まあ、考えとくわ～」と言うことで私だけが一年の計を言う羽目に今年もなりました。

# 田中先輩と私　1

焚店主

ずいぶん長い付き合いなのだが、田中さんの生業をよく知らない。私が学生であったときのことである。大学の新町校舎の北の端に、壁が剥がれ落ちそうになった暗い山岳部の部室があった。そこで田中さんに出会ったのが最初である。

「東洋の魔女を率いて東京オリンピックで華々しい活躍をして一躍有名になった大松博文監督の選挙運動の手助けをしている。だれか手伝うものはおらんか？」と得意げにしゃべりながら少ない我れら現役部員を叱咤激励する風だが、どういう訳か学生らの反応が鈍く浮き上がっている感じがした。新入部員である私は、その辺の事情がわからず面白い変わった先輩だなあ。という印象をもった。

なぜ大松監督の選挙運動を熱心にしていたのか。田中さんは特別政治に興味を持ち、大松さんを国会に送らなければならないという使命感に燃えていたわけではない。二人を結びつけるキーワードはビルマ（ミャンマー）だ。

当時も現在も、ビルマの山岳地帯は簡単に入れる地域ではない。原住民のゲリラ活動が活発なために、入域許可の取得はひじょうに困難なのだ。そのうえ、うっそうとした熱帯多雨林地帯は簡単には文明人を寄せつけない。すなわち、世界有数の未探検地域なのだ。田中さんはその地を狙っていた。

いっぽう大松さんは、大戦中おびただしい戦死者を出したインパール作戦に従軍し、生還した数少ない生き残りである。田中さんは、大松さんのビルマにおけるコネクションを利用としたのだ。けっきょく大松さんは落選し、田中さんのもくろみも潰えてしまう。

当時、たまに先輩が来れば学食にでも行き飯をおごってくれたものであるが、田中さんはそういう事はしなかった。飲み食い、特に酒を嫌っていたせいか酒席での思い出はほとんど無い。我々が良い先輩と思うのは、如何に飲み食いさせてくれたかが重要な判断基準となるから田中先輩はその点からも評価が低かった。

そんな周りの目を気にせず田中さんは、仕事の合間に幾度か部室に顔を出しては、人がやってない遠征をやれと発破をかける。とにかく人のやっていない面白い事をやれと言う。

うさんくさいと思っていたのか部員達はあまり相手にせずにいたが、私は、面白いことをやっている人だと好奇心を持った。そんな私を田中さんはかわいい後輩と思ったのか、来るたびに山のことや冒険談を熱心に聞かせてくれた。

幾度か田中さんの話を聞きながら、どうしてこの人が皆から少しどころかかなり疎んじられている訳が私なりに理解するようになった。田中さんは、私より歳が一回り上であったが他の先輩のように勤めている会社への忠誠心はまるで無く、あくまで自由なフリーの歩合セールスマンのように見受けられた。

山の先輩に限らず多くの者は、学生時代には色々と正義感溢れた社会改革の必要性を説くような議論をするが卒業すると急に真面目なサラリーマンに変身するのである。しかし、田中さんは卒業後も学生時代と変わらず自分の夢を諦めるどころか、ますます追いかける思いが強くなっていくから、周りの日和見な人間とは合わないのであった。

当然と言えば当然で、学生時代に偉そうな事を言っていても会社勤めになれば所詮学生時代の夢として頭の片隅に置いてしまう大方の人とは余りにも違うから、田中先輩は相手にしたくない変人のような存在に一般の人には映ってしまうのである。

会社という場所は、金儲けの為に全社員が上司の指図に従い文句を言わずに働き続けるところである。その金儲けをする組織で働くことを皆が疑いもせずに受け入れているように見えるが、普通の人は、心のどこかで社会の矛盾を感じながらも黙々と働き続ける事が、己の宿命だと自分に納得させることによって自分の生活を守り無難な人生を保障するのだと思いたかったのだ。

しかし、田中さんにとってはそんな打算的な考え方は最も軽蔑すべき考えであり、認めたくない人間であった。金儲けの為にくだらん会社の上司にこき使われて日々生活をすることは能無しの奴だと烙印を押すのであった。

こんな人がどうして生きていけるのか。私は大いに興味を持った。とてもじゃないが組織の中ではやっていけないだろう。山岳部というところは相当変わった人間がいるところであるが捨て身というか、少年のようなまま大人になる人は滅多にいない。

こんな事情から私は田中先輩に興味を覚え、田中さんも私に大きな期待を寄せることとなった。

私が田中さんに連絡をすることは滅多になく、いつも田中さんから連絡があってわざわざ会いに来られた。田中さんは酒は身を滅ぼす麻薬のようなものだと一口も飲まなかったが、タバコはいつも吸う愛煙家であった。そんな事情からか、酒が出る席への誘いは断りコーヒーとタバコが吸える喫茶店での話しが好きであった。

携帯エッセイ18

## 「やっと大人になった」

「介護の為、毎週、金曜の晩に母宅に泊まりに行く」

そういうと殆どの友人は

「偉いねぇ～、男なのに」と褒めてくれた。

しかし、自分としては、半分は『親への恩返し』だと思っていた。言うまでもなく当然のことだ。そして、もう半分は、『修行』だと思っていた。私は、青年の頃に倉田百三の『出家とその弟子』を読んで以来、世俗の煩悩の中でこそ、本当の修業が出来る、と確信した。以来、逆境に直面すると「人間は死ぬまで修業だ」と自分を励まして来た。

介護から学んだものは多い。大掴みに言うと三つある。

第一は、命を学んだ。始めたら中途半端に出来ないのが介護だ。雨が降ろうが槍が降ろうが、決めたスケジュールはきちんと守らないと命に関わる。風邪もひけない。年寄りは体力がないから風邪を移すと死に直結する。

第二は、自分の老後を考えるようになった。

『自分も最後は老人ホームに入るしかないのかなぁ。しかし、我々のような団塊世代は人口が多いから、みんなが公営の老人ホームに入居することが出来るのだろうか。出来なければ、民間の老人ホームに入るしかないが、高いんじゃないかなぁ』

試しに私の自宅の近くの老人ホームに入居条件を聞きに行ってみたら、入居時に一六〇〇万円を納め、毎月二十五万円を支払わなければならない、という。

『こりゃ、大変だなぁ…。まぁ、いいか。成るように成るだろう。ポックリ死ぬかも知れないし。取り敢えず、健康で長生きすることだ』

と自分を納得させるしかない。

第三に母の愛の尊さを改めて知った。育てて貰っている時は気付かなかった。しかし、自分で子供を育て上げ、母の介護をしてみて、親の愛の慈しみ深さが分かった。

父の愛は知らない。私が三才の時に、余所に女を作って出て行った。養育費を送って来るでも無し、無責任な男だ。母は言っていた。

「戦争に行ってから人間が変わってしまった」と。もう死んでいるだろう。今さら父の事はどうでも良い。辛いことも以上に楽しいことがあったからだ。今では、生まれて来たことに感謝している。

母の慈愛を無くしてみて人生の寂しさを感じた。

『親を亡くして初めて大人になった』

嘗て、そう言った知人が居る。その言葉の意味が、ようやく分かった。（龍）

## 俳句

養女

【二〇〇九年インド紀行】

○ 牛ふんをはりつけ残る指のあと

○ なにげなくラクダが横を悠々と

○ 商人の呼び声高く雑踏を行く

○ 早朝にサリーのままで沐浴す

○ 葉で出来た灯明皿に祈りこめ

○ 赤帽は頭にトランク二つのせ

○ 満月やインドの花むこ馬にのり

## ふれあい

二歳になったばかりの従兄弟の孫娘は、両親以外の人に抱かれるのをきらう。僕が無理に抱こうとすると、そこまで嫌がらなくても、と思うほど、泣いて拒む。その子にかぎらず、日本の幼児は概して同じような反応を示す。

数少ない海外経験ではあるが、見知らぬ子どもを抱きあげても、それほど嫌がられることはない。パキスタンでもインドでもチベットでもネパールでもロシアでも、泣いて嫌がるということはほとんどなかった。きょとんとして僕の顔を見つめ、時に笑みを浮かべる子もいた。では、日本の子とほかの国の子が示す反応の違いは、何に由来するのだろうか。

日本の幼児は、いろいろな人に抱かれるという機会が少ない。母親ともっとも濃密に結びあうのはどこの国の子も共通するだろうが、日本ではそういう身近な近親者以外の人とふれ合うことが少ないと思う。

隣近所や友人知人などいろいろな人に、時にはごつごつした腕で少々あらっぽく扱われたり、あるいはふくよかな腕で抱きしめられたり、ということが少ないのではないか。そういうスキンシップは、情操が育つうえで大事な役割を担っているように思う。（蓑）

## 連載　女８０年の軌跡　眞糀さん

### 数字の不思議

新政権の中でも色々と方策を立てて、不況から脱出すべく努力が見られ、新しい年に希望が持てる良い年でありたいものです。

一年は十二ヶ月ある。一月は三十一日ある。今日は一月一日。一という数字が重なっていて格別なものを感じる。

平成二十二年だから、二月二日、二月二十二日。ずらりと二が並ぶ。

町名の番号でも、二丁目二の二十二とある。その番号になっている家族は如何様に思って居られるかは知らないが、私は数字というものが只の記号ではなく深く考えれば、何かの存在が思えてくるから不思議なもの。

トラ年、自分の当たり年。お参りに一人で来た私。にぎやかに三世代で来ている家族。昔のように堅苦しいお参りでなく、行楽気分、あるいは散歩がてら…といった感じの人も多い。

一人あり
三世代あり
去年（こぞ）今年（ことし）

### くれない

人は何も分からなく生き
人は何か分かったような顔で死ぬ
雨もようの夜はほんとうに暗い
鼻をつままれてもわからぬ闇だ
木々の葉は、黄金色に、韓紅（からくれない）に
それらは西陽の光をうけて揺れ動き
あるものは美しく舞いながら
枝を離れて散ってゆく
紅葉の一部は、いやらしい程に人間的な紅に光るのも
これを見て淋しい思いをするのは誰

### 気になる言葉遣い

「健康のため吸いすぎに注意しましょう」商売に水をさすような歯の浮くことを書く必要もないのに、誰のさしがねか。

正しくいうなら「タバコを吸わない人のために場所をえらんで吸いましょう」。これは、この頃守られてきたみたい。

ナンセンスといえば、山のわきを車で通ると「落石注意」とある。全くどう注意すればよいのか。

こんなひねくれた人間もいるのだ。

### 私の好きな詩

夢がある人には　希望がある
希望がある人には　目標がある
目標がある人には　計画がある
計画がある人には　行動がある
行動がある人には　結果がある
結果がある人には　反省がある
反省がある人には　進歩がある
進歩がある人には　夢がある

物忘れ
よりそう心の淋しさは
主の姿が遠くなってゆく

この詩を心の糧にしています。

### 編集後記

今年の夢―

年金が統一されて、全ての人に最低額7万円が支払われるような年金制度が出来ること。次には住宅が安くて質の高いものになるような公共投資が行なわれること。地方への人口移動が行なわれる施策。都市圏から人口が減るような施策。

中学生の頃から考えていたことがある。田舎から優秀な生徒を都市部へ出さず、田舎につなぎとめておく為に、毎年成績優秀者の数人は役場など地元の職場をあてがい人材の集積を行なう。

何事も人であるから、優秀な人が毎年蓄積されれば、おのずと地域の活性化のアイデアや地域の力が出てくる。こんな政策を村や町で行なえばいいと提案したが、誰も聞き入れなかった。

優秀な人が都市部から地方へ住み着く流れが日本のあちこちで話題になるような年であってほしい。


早春のお仕立承り会

２月８・９・１０日

着物地の柔らかい肌さわり
絹の暖かさ
想いでの布でブラウスを作ってみませんか！

期間中はセール価格にて承ります

☆☆☆

着物から服を仕立てます

梵～ぼん～